

# 石敢當と文化交渉

— 奄美諸島を中心として —

高橋 誠 一

## Ishigantou (Talismanic Stone) and Cultural Interaction

— Mainly in Amami Islands —

TAKAHASHI Seiichi

Situated at T- and L-intersections and at four-corner intersections to drive away evil spirits or energy, Ishigantou talismanic stone tablets were a part of the so-called traditional geographical outlook that was transmitted from China.

In the kingdom of Ryukyu in Japan, Ishigantou were installed throughout the cities and villages, and this paper attempts to examine their distribution, etc., with the Amami Islands of Kagoshima Prefecture that was once a part of Ryukyu as the main area of focus. This tradition was brought from China to Okinawa Island, the center of the Ryukyu kingdom, and, as a result, it was then diffused throughout Ryukyu. At the same time, however, due to Ryukyu coming under the rule of the Kagoshima clan at the beginning of the 17th century, after it had spread from Okinawa's capital city of Naha to Kagoshima, it was transmitted from Kagoshima to Edo (present day Tokyo) and throughout the whole of Japan. On the other hand, it was possible to confirm that this tradition also propagated and spread in the opposite direction, from Kagoshima to the Amami Islands.

Cultural phenomena must be understood as a multi-directional and intricate thing, and I have illustrated the facts that there are many cases of culture originating from individuals or specific groups, and that its original character is changed by the process of cultural negotiation and new aspects emerge.

キーワード：石敢當、琉球、奄美諸島、喜界島、伝統的地理観、文化交渉

### 一 石敢當の概要と既往の研究

石敢當は、中国から伝来したいわば伝統的地理思考ないし伝統的地理観の一表象である。これらは沖縄のみならず、かつて琉球に含まれた奄美諸島はもちろんのこと、琉球以外の日本の各地にまで伝播・拡散していった。

中国では古くからT字路や四差路は百鬼の横行する場所と考えられ、魔除けなどとしての石敢當が設置されることが多かった。しかしその起源については、確実に判明しているわけではない。これに関し

では諸研究があるが、唐の代宗大暦5年(770)に作られた「石敢當」の石碑が見つかったことなどから、すでに唐代には始まっていたとされる。要するに、中国においては8世紀後半に、石敢當を立てる風習が広がり、福建省地方を経て、琉球や東南アジア諸地域に伝播したと考えるのが通例である。琉球に伝わったのは定かではないが、15世紀の半ば頃に伝来したと考えられ、さらに16世紀末には日本に至り、北は秋田、青森、さらには北海道にまで広がっていったとされる。

日本における石敢當に関する研究は、これまでも数多く蓄積されている<sup>1)</sup>。中でも広域にわたる精力的な調査・研究者として特筆されるべきは、小玉正任氏と久永元利氏であろう。

まず小玉正任氏による研究成果は、2冊の大部の著書にまとめられている<sup>2)</sup>。この著作は、各種の文献史料を渉獵して石敢當の起源や系譜を検討するとともに、いわば石敢當同好者からの情報を集めて、日本における石敢當の分布と実態についての詳細な調査報告を収録したものである。

以下、小玉氏の研究によって、日本における石敢當の分布を概観してみよう。小玉氏によると、2004年4月現在、全国29都道府県で石敢當の存立が確認されるという。最も多いのは沖縄県であって具体的な数は確認されていないが、氏の推定では1万基を超えるとされる。ついで多く分布しているのは鹿児島県で奄美諸島を含めて1000余基がある。これにつぐのが鹿児島県の隣県である宮崎県の94基であって、琉球との関係の深かった鹿児島県に隣接している地域であることを考慮に入れば、ごく当然のこととも思える。

ところが、宮崎県に次ぐのが、秋田県の38基、徳島県の13基、大阪府の11基、佐賀県の9基、東京都の8基、神奈川県6基、兵庫県の5基、青森県の4基、長野県・宮城県の各3基、長崎県・広島県・和歌山県・京都府・千葉県・埼玉県の各2基、大分県・愛媛県・山口県・岡山県・奈良県・滋賀県・静岡県・栃木県・山形県・北海道の各1基となっている。もっとも小玉氏のあげる数値が確定的なものかといえば、そうではない。氏自身も述べておられるように、石敢當は現在も増え続ける傾向があるし、また2004年の時点に限っても、なお調査から漏れている例も相当数存在することは否定できない。現に筆者も小玉氏があげておられない事例を実見したこともしばしばあるし、後述の久永氏の奄美諸島での調査によると、小玉氏の数値よりも各段に多い事例が紹介されている。したがって、ここであげた石敢當数はあくまでも概数と理解しておくべきである。

しかしながら小玉氏の提示によっても、ある種の傾向を指摘することができる。現に小玉氏も、これらの分布状況から、沖縄・南九州に濃密に存在し、北は北海道の函館まで散在しているが、山陰・北陸・越後の日本海側には全く見当たらないのに、山形・秋田・青森に古い石敢當が存在し、とくに秋田には38基(かつては47基あった)と本州でもっとも多く石敢當が確認されるのは注目に値すると述べられる。また、四国の徳島の13基はかつて27基を数え、古いものもいくつか残っていることも興味深いとされる。さらに過去においても現在においても中国との文物の交流拠点である福岡・長崎に石敢當の影が薄いことは不思議なことであるとも記される。

1) たとえば窪 徳忠氏の一連の研究などがある。これら石敢當の研究については、後掲の小玉正任氏の著作に詳しい。

2) 小玉正任『石敢當』、琉球新報社、1999年6月27日、1-342頁。

小玉正任『民俗信仰 日本の石敢當』、慶友社、2004年12月21日、1-473頁。

小玉氏は、日本における石敢當の分布について、秋田・埼玉・長野県などのものは、おそらく、儒学者による知識によって主として江戸から広がっていったのであろうと推定している。埼玉や秋田、長野などへの伝播について、江戸から発信されたものと解釈することについては異論はないが、中国の文献によって学んだ儒学者の知識のみで各地に広がっていったとすることについては、議論の余地があるように思われる。すなわち、中国から琉球へ伝わり、さらに薩摩を経由して江戸へ伝わった諸文化は、他に多く認められる。また近世の琉球ブームというようなこともあわせ考えると、江戸への伝来については、やはり琉球を無視することは適切ではないように思われるからである。

いま一人、特筆すべき研究者を忘れてはならない。久永元利氏という大阪市淀川区の加島で食堂を営むかたわら石敢當を調査・研究している人である。

久永氏は、奄美諸島などにおいて石敢當を悉皆的に調査、詳細な地図の上でその設置場所・個々の大きさと形状、推定年代、石材、刻字、設置家屋の名前などを克明に記録した報告書を作成しておられる。小玉氏の調査では、奄美諸島の石敢當は1999年では377基、2004年では361基とされているが、久永氏の報告書によれば奄美諸島全体で642基が記録されている<sup>3)</sup>。したがって奄美諸島の石敢當の数値については、久永氏の報告がより実態に近い。しかし、久永氏の報告書は悉皆的な現地調査に裏付けられたものではあるが、奄美諸島においても、石敢當の数は年々増加しつつあると理解すべきであろう。たとえば沖永良部島和泊町国頭の郵便局前には新しい立派な石敢當が設置されている。この郵便局は2003年ないし2004年に新築されたものであるが、筆者の2005年の聞き取り調査によれば、東京に居住している沖永良部出身の親戚が、新しい郵便局は道の突きあたりにあたるから建てておいたほうがいいと言って、沖縄の業者に注文して贈呈してくれたとのことであった。このように久永氏の調査の対象になっていない事例も存在することは確かであり、今後も増加していく可能性が高く、久永氏の報告は固定的な数字ではない。筆者も与論島や沖永良部島における石敢當については悉皆的な調査を実施したが、その際にも久永氏の報告書には記載されていない事例を確認することができた。とはいえ、奄美諸島全域を詳細に調査した久永氏の報告は他に類を見ないもので、本稿においても、久永氏の報告書にあげられた数値を基本として考察を進めたい。なお沖縄県内における石敢當に関しては、筆者も那覇市首里地区と壺屋地区で、現地調査を実施したが、その結果については別稿にゆずりたい<sup>4)</sup>。

3) 久永元利『石敢當探訪 第一集 喜界町編』、雪屋書房、1989年11月11日、1-84頁。久永元利『石敢當探訪 第二集』、雪屋書房、1991年7月7日、1-167頁。なお第一集は喜界町役場から、第二集については沖永良部郷土研究会会長の先田光演氏に提供いただいた。また2006年6月に、久永氏に直接面談し、種々のご教示をいただいた。ともに記して感謝の意を表したい。

4) 那覇市首里地区については、関西大学地理学教室『那覇市とその周辺の地理 関西大学地理学教室実習調査報告書(29) 2004年度』、関西大学文学部地理学教室、2005年3月1日、1-150頁に報告している。また千田稔氏主催の研究会において発表し（2005年10月29日開催、要旨は『東アジアとその周辺地域における伝統的地理思考の近代地理学の導入による変容過程 平成16年度～18年度・科学研究費基盤研究(A)(1) Newsletter No.6 (千田稔代表)』、2006年1月12日)、さらに千田稔氏編著として刊行予定の論文集『アジアの時代の地理学 ― 伝統と変革 ―』（古今書院）にも「琉球における石敢當 ― 那覇市首里地区を事例として ―」として公刊される予定である。さらに壺屋地区の石敢當に関しては、関西大学アジア文化交流研究センターと日本學術振興会科学研究費補助金基盤研究(B)（研究者代表 高橋誠一）の共催で2007年2月17日に沖縄県立公文書館で開催された「アジア文化交流のなかの沖縄とベ

## 二 奄美諸島における石敢當

### (1) 与論島の石敢當

与論島は、奄美諸島の最南端に位置する面積約20.8km<sup>2</sup>の低平な島である。『南島風土記』には「万曆42年（1614）甲寅任与留濃地頭職」の記事があり、また『おもろそうし』には「かいふた」の名称が見える。沖縄から与論島を見たときに、弓のように見えること、あるいは、低平で夜光貝のふたのように見えることから、このような名称がつけられたのではないかともいわれる。

与論島は英祖7年（文永3年、1266）に琉球王英祖に貢納して以来、343年間は琉球の支配下におかれた。武寧10年（応永12年、1405）に琉球北山怕尼芝王の三男王舅が世之主として渡り、与論城の築城に着手したとされ、その後、尚真36年（永正9年、1512）に琉球王尚真の次男尚朝栄（花城真三郎）が与論島主として来島して祭政一致の制度の基礎固めをしたと伝えられる。しかし慶長14年（1609）の鹿児島藩の琉球侵攻の結果、奄美諸島は琉球から切り離され、慶長16年に与論島も鹿児島藩の直轄地となった。慶長18年には奄美大島の大熊に代官が置かれて奄美全域が統治されるようになり、また元和2年（1616）には徳之島の亀津に代官が置かれて沖永良部島と与論島までが支配、さらに元禄3年（1690）には沖永良部島の和泊に代官詰所が設置、与論島をもあわせて支配するようになった。その後、安政7年（1860）に与論島の大水に仮屋が設けられて書記2名が置かれ、2間切（西間切は大水間切とも呼ばれて、現在の城・立長・茶花・朝戸の一部、東間切は現在の西区・東区（大字麦屋）・古里・朝戸の一部）として支配されることになった。寛文4年の石高は1270石とされるが、享保12年（1727）の石高は2413石とされる<sup>5)</sup>。

さて与論島では、大字麦屋に8基、朝戸に1基の石敢當が確認されている。与論島の場合は、大字の範囲と集落の関係がやや複雑になっており、ことに麦屋地区はかなり広い範囲にわたっている。したがって麦屋の8基は、城集落に限定されていると表現するほうがよいであろう。また朝戸の1基も、城集落に隣接しているから、与論島における石敢當は、与論城に近接した地区に集中していると言っている。これに対して、茶花・那間・古里・立長（大字の記載は50音順）には石敢當は存在しないとされる。6大字のうち2大字に石敢當があることになる。しかし、これはあくまでも久永氏の調査による数値で、筆者の調査によるとかつては茶花集落の中にも石敢當が設置されていたらしい。

城集落の8基とは言っても、4基が一軒の屋敷に集中（道路から屋敷敷地に入る箇所に対面する2基と屋敷敷地内の付属道の角に1基、さらに家屋に通じる屈曲点に1基）している<sup>6)</sup>。要するに、沖縄県内に見られるような集落内の道路の突当りというような通例とは異なる箇所も認められる。とはいいいながら、与論島における石敢當の分布が与論城に近接した場所に基本的に集中していることは注目してよい。ここは島内における中心集落であるばかりでなく、琉球における古い集落形態を色濃く残している

---

トナム」において「琉球の集落景観と石敢當 — 首里と壺屋 — 」として発表した。これについても「那覇市壺屋地区における石敢當と集落形態」として『アジア文化交流研究』第3号（2008年）に収録予定である。あわせて参照いただければ幸いである。

5) 与論島をはじめ奄美諸島に関する概要は、『角川日本地名大辞典 46鹿児島県』（1983年3月8日）などによった。

6) 与論島における石敢當の現地調査は、与論町在住の竹 盛窪氏と竹 真弓氏とともに2005年に実施した。



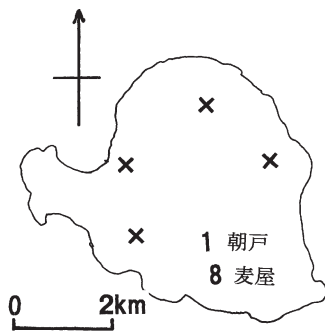


図1 与論島の石敢當

地区でもある。その設置は明治以降であるとは言いながら、沖縄と共通する「ヒンプン」を設けた屋敷も存在しているし、「シニグ」と呼ばれる古くからの伝統に支えられた収穫祭の本拠として重要視されてもいるのである<sup>7)</sup>。また城集落に設置されている一つの石敢當に刻まれた「石敢當」の字体が、沖永良部島の石敢當の一例と酷似していることなども注目される<sup>8)</sup>。

なお与論島全体でみると、島の面積は20.8km<sup>2</sup>であるから約2.3km<sup>2</sup>당りに一つの石敢當、島の世帯数は1939世帯であるから約215世帯に一つの石敢當という数値が得られる<sup>9)</sup>。しかし石敢當の集中している麦

屋・朝戸地区の世帯数は676世帯、約75世帯に一つ、先述のように同地区のなかでも城集落とその近辺に石敢當の分布が限られているから、この島における石敢當はごく限られた場所に稠密に分布しているということができる。

さらに与論島の石敢當に関しては、特筆すべき点があるように思われる。筆者が実見した石敢當がすべてという保証はないが、少なくとも観察することができたもののなかに、沖縄島などで一般的に見られる新しい表札型の見られない。以下に述べる奄美諸島でも表札型の新しい石敢當は数多く見られるが、与論島では近年のいわば流行による新石敢當の設置という現象が認められないのである。また沖永良部島以北の奄美の島では、「石敢當」という名称やその意味についての知識はかなり流布しているような印象を受けるが、与論島においては郷土史に理解の深い人にさえ石敢當の所在や意味について意識していない傾向があるように思われる。要するに与論島においては石敢當に関する意識が希薄であるといってよい。この点にこそ、後述するように、琉球から奄美諸島に伝播した石敢當が、鹿児島藩経由で方向としては逆に奄美諸島に及び、その最果ての与論島には及ばなかったという証拠になるのではなかろうか（図1）。

## (2) 沖永良部島の石敢當

沖永良部島は、与論島と徳之島の間位置する面積約94.5km<sup>2</sup>の島であるが、その名称は大隈諸島の口永良部島に対するとされる。隆起珊瑚礁に覆われた平坦な段丘状の島で、古生層の大山（標高245m）を中心として第四紀琉球層群で覆われたカルスト地形が発達している。

7) 高橋誠一・竹 盛窪『与論島 琉球の原風景が残る島』、ナカニシヤ出版、2005年4月1日、1-208頁。

8) 沖永良部島在住の先田光演氏の教示による。

9) 以下の島や市町村の面積については市町村が公表している数値をはじめとして各種の統計によっては異なる場合が見られる。本稿では原則として『角川日本地名大辞典 46鹿児島県』（1983年3月8日）に記載されている数値を用いた。また世帯数については統計年次によって大きな違いがある。本稿では、できるだけ同じ時期の大字別の数値をも参考にする必要性と、人口減少や世帯数の減少が極端になっている現状よりは、ある程度かつての状況をもとにして考察するために、同辞典に記載されている数値を用いた。したがってこれらの世帯数の数値はほぼ1980年ごろの数値であって、現在はかなり減少していることを断っておきたい。ただし喜界町に関しては同時点の数値とともに2006年2月1日現在の数値を併用している。

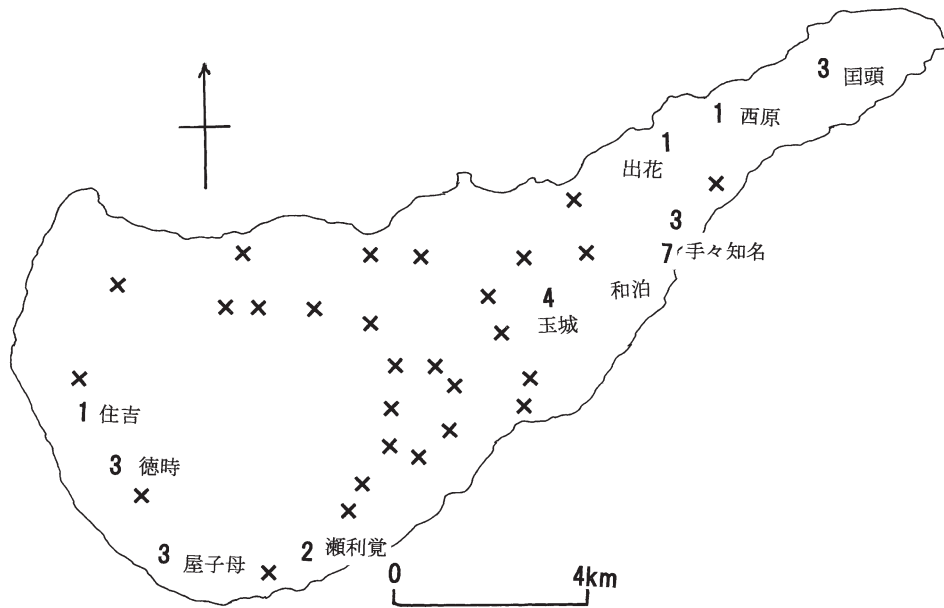


図2 沖永良部島の石敢當

文永3年(1266)に琉球王の英祖の支配下に入り、その翌年には按司が遣わされて祭政一致の形態が定着したという。琉球三山のうちの北山王と沖永良部島の西目祝女の姪との間に生まれた次男の真松千代が応永2年(1395)ころに島主に封ぜられたとされ、この世之主の純琉球式の掘込式方形納骨堂の墓が和泊町内城に存在する。

慶長14年以降、鹿児島藩の直轄地となったことは与論島と同様であるが、元和2年(1616)には徳之島の亀津に代官が置かれて与論島とともに沖永良部島も支配された。しかし、元禄3年(1690)に徳之島とは分立して、沖永良部島の和泊に代官詰所が設置された。この状況は明治2年まで続いて在番所と改められた。江戸期の沖永良部島は、琉球時代の間切制度を踏襲し、島内の行政区画は3間切(喜美留、大城、久志検)として与人3人が管理していた。享保12年(1727)の地所再丈量地位査定高額では6410石余とされるが藩の徹底した砂糖専売制度の負担にあえいだ。

沖永良部島における石敢當は、和泊町に19基、知名町に9基がある。島の面積は約94.5km<sup>2</sup>であるから単純に計算すると約3.4km<sup>2</sup>に一つの石敢當があることになる。また島全体の世帯数は5252世帯であり、約187.6世帯に一つの石敢當があることになる。面積からすれば与論島の2.3km<sup>2</sup>と比べると希薄ということになるが、世帯数から見れば沖永良部島のほうがやや密度が高いことになる。しかし全体的には、沖永良部島のほうが稠密に分布しているような印象をぬぐうことができない。すなわち島内の各所に石敢當が存在し、かつ多くの住民の意識下に入っているように思われるからである。たとえば国頭集落において、以前は屋敷の前の道路に面して設置されていた石敢當を、大切なものであるから屋敷地内部の庭に移設した例を実見できた。この例からもわかるように、保存すべき大事なものとしての認識が見られる。しかし一方では、本来の設置場所としての知識は薄れてしまっているとも言うる。ただし同じ島内であるとはいっても、分布には若干の粗密がある。和泊町は2735世帯、約143.9世帯に1基、知名町は2517世帯、約279.7世帯に1基ということになり、鹿児島に近い和泊町のほうが密度が高い。

大字単位でその分布を見れば、和泊町では、国頭3、玉城4、出花1、手々知名3、西原1、和泊7に設置されており、畦布、内城、大城、喜美留、後蘭、瀬名、谷山、永嶺、根折、古里、皆川、和には見られない（大字の記載は50音順）。18大字のうちの6大字に石敢當が設置されていることになる。知名町では、住吉1、瀬利覚2、徳時3、屋子母3に見られるが、赤嶺、芦清良、余多、大津勘、上城、上平川、久志検、黒貫、竿津、下城、下平川、新城、田皆、知名、正名、屋者には見られない（大字の記載は50音順）。20大字のうちの4大字に限られているわけである。

この数値だけから見れば、与論島とさしたる違いはないように感じるが、島北東部と島南西部の沿岸部の集落においては、実際の数よりも多くの石敢當があるような印象を受ける。特に、和泊や手々知名や瀬利覚と屋子母という沖永良部島の二つの主要港の近辺に多くの分布が認められることに注目すべきではないだろうか。しかもそれらの石敢當は、かなり年代を経たもののほかに、先述したような国頭郵便局の新築にともなって設置されたものをはじめとして新しく設置されたものも多く見られ、かつ知名町の資料館に展示されている一例があることなど、住民によっても広く認識されているのである。この点、沖縄に近い与論島とは異なった特色を示しているといえることができる（図2）。

### (3) 徳之島の石敢當

徳之島は奄美諸島の中で奄美大島について大きな島で面積は約247.9km<sup>2</sup>、古生層を基盤として井之川岳（標高645m）を主峰とする山脈が中央部に走っている。耕地面積は奄美諸島中、最大であるが、文政14年から明治6年までは奄美大島・喜界島とともに鹿児島藩の黒糖工場化して圧政にあえいだ歴史を持つ。

徳之島の初見は『続日本紀』文武天皇3年（699）に奄美・度感等の人が上洛した記事があり、以後、朝貢関係が続けていたと考えられる。また遣唐使南島路時代には「奄美訳語」の職掌などが見られ、琉球や中国との中継地としての機能も認められる。

いっぽう奈良時代以前から徳之島には階級的首長である按司加那支が存在していたとされる。天長元年（824）に大隈国に編入されたとはいうものの、大和朝廷との結びつきは次第に希薄化し、按司割拠時代を経て琉球との交渉が強くなっていった。弘長3年（1263）徳之島第一島主「首里の主」が来島し琉球統治下に入り、文永3年（1266）には琉球に入貢して琉球服属時代に入った。万暦28年（慶長5年、1600）のノロ補任辞令書などはその事実を如実に物語っている。

しかし慶長14年（1609）樺山美濃守久高を大将とする薩摩軍の琉球侵攻の途次に徳之島も攻略されて鹿児島藩の直轄地となった。ついで元和2年（1616）には相良堪解由が奉行として支配を始め、寛永17年（1640）に職名が代官と改称されて以後、慶応3年（1867）まで代官制度は続いた。代官の下には附役3人・横目2人を亀津に駐在させて全島の政権を掌握、過酷な圧政が続けられた。藩政時代の石高は、慶長15年の奄美5島の検地帳によれば5島全体で3万5614石、元和7年には4万3257石と改められたが、島ごとの石高は明らかではない。しかし嘉永4年（1851）の「徳之島絵図」によると徳之島の総高は1万5318石余と見える。

徳之島における石敢當は、島全域で101基が確認されている。徳之島の面積は247.9km<sup>2</sup>であるから、単純に計算すれば約2.5km<sup>2</sup>に一つの石敢當が存在することになり、また10917世帯という数値からすれば、

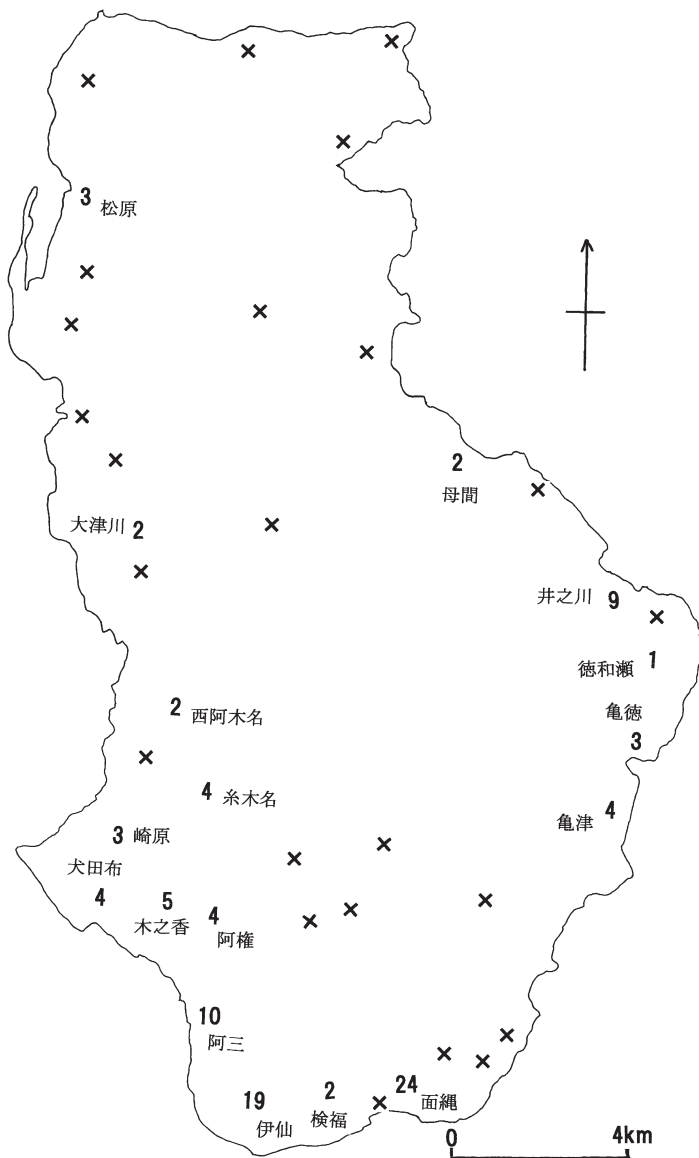


図3 徳之島の石敢當

約108.1世帯あたり到一个の石敢當が設置されていることになる。面積からすれば沖永良部島よりは高密度で与論島とはほぼ同じ、世帯数から見ればいわゆる奄美諸島の南三島のなかで最も高密度である。

しかし同じ徳之島であっても町別に見ると、石敢當の密度には相当の差が認められる。すなわち、徳之島町には19基(5.5km<sup>2</sup>に1基、258.2世帯に1基)、天城町には7基(11.5km<sup>2</sup>に1基、395.4世帯に1基)、伊仙町には75基(0.8km<sup>2</sup>に1基、43.3世帯に1基)があり、極端に伊仙町における密度の-highいことが注目される。

徳之島町では、井之川9、亀津4、亀徳3、徳和瀬1、母間2に設置されているが、他の尾母、金見、神之嶺、花徳、山、下久志、白井、手々、轟木には見られない(大字の記載は50音順、以下同じ)。14の大字のうちで石敢當は5大字に限られている。同様に、天城町では、大津川2、西阿木名2、松原3に設置されており、他の浅間、天城、岡前、兼久、瀬滝、当部、与名間には見られない。10の大字のうち3

大字に限られているわけである。

これに対して伊仙町では、阿権4、阿三10、伊仙19、糸木名4、犬田布4、面縄24、木之香5、検福2、崎原3に設置されており、喜念、小島、佐弁、中山、馬根、古里、目手久、八重竿には設置されていない。17大字のうち半数以上の9大字に石敢當が設置されている。

徳之島におけるこのような分布密度の差は、なにに由来するものなのであろうか。一見すると、島全体のうちの海岸部に密度が高く、内陸部には希薄であることが理解できる。さらに海岸部のなかでも平地の広がる島の中東部と南西部に多く分布している。平地面積と不可分な関係にあると思われる人口密度を見ると、天城町は約109人/km<sup>2</sup>、徳之島町は約144人/km<sup>2</sup>、伊仙町は159人/km<sup>2</sup>(いずれも1980年ごろ)であって、人口密度の高い町ほど石敢當が高密度に設置されている。また徳之島町の亀津は代官所が置かれ、亀津に接した亀徳は徳之島におけるいわば表玄関としての港として機能してきた地区であり、極



端に多くの石敢當が見られる伊仙町の面縄には鹿児島藩の米や砂糖の集荷倉庫があったと伝えられる蔵屋敷跡などもある。それゆえ、平地に恵まれて生産力が高く、かつ島外からの文化を受容しやすかった地区に多いと思われる（図3）。

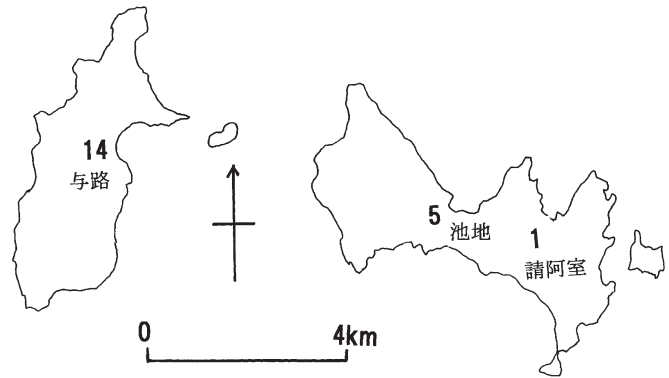


図4 与路島と請島の石敢當

(4) 与路島と請島の石敢當

請島は加計呂麻島の南に位置する島で面積約13.7km<sup>2</sup>、与路島は面積約9.5km<sup>2</sup>、とも

に奄美大島や加計呂麻島と同様に、古生層からなる沈降性の離島である。現在は両島とも瀬戸内町に属しているが、請島には池地と請阿室、与路島には与路の集落がある。

両島における石敢當は、池地に5基、請阿室に1基、与路に14基がある。請島の場合は、約2.3km<sup>2</sup>に1基で、約25.3世帯に1基、与路島の場合は約0.7km<sup>2</sup>に1基で、125世帯という数値からすれば、なんと8.9世帯に一つの石敢當が存在していることになる。与路島の石敢當の多さは特筆すべきであるが、その理由はわからない（図4）。

(5) 加計呂麻島の石敢當

加計呂麻島は奄美大島の南西にある島で、奄美大島とは大島海峡で隔てられている。瀬戸内町に属

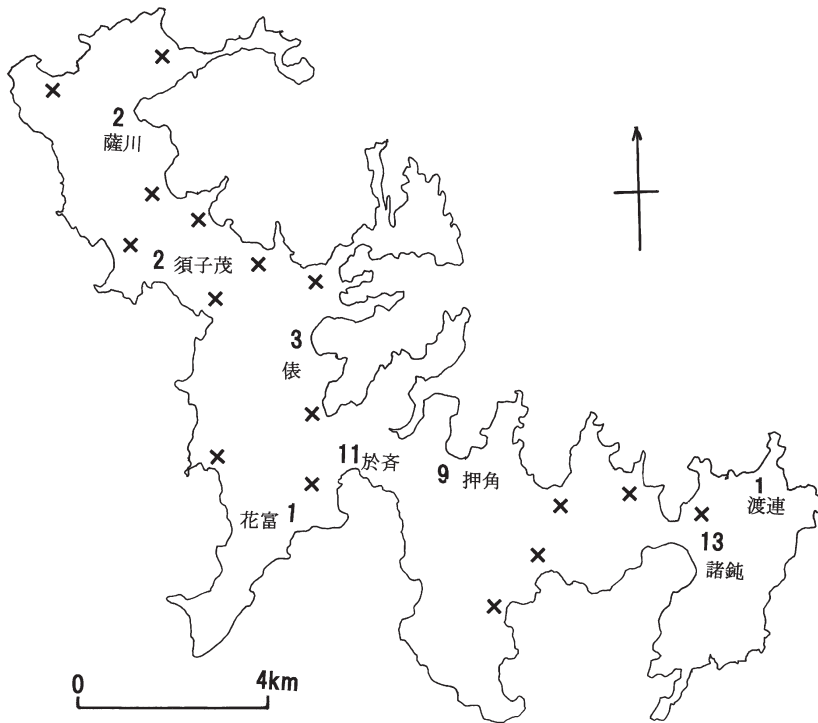


図5 加計呂麻島の石敢當

している加計呂麻島本島の中心集落は諸鈍であるが、他にも多数の集落があり、ほとんどは海に面している。しかし、各集落は隣接する集落であっても言語や習俗に差異があって、民俗学的にも注目される島である。島全体が沈降地形のために海岸線の屈曲は著しく、面積は約77.2km<sup>2</sup>でしかないが、海岸線の距離は約147.5kmにも及ぶ。そのために水深の深い天然の良港が多く、特に薩川湾は軍港としても利用された。現在も台風時の避難港としての利用がされる。ただし全島が古生層から

なる山がちの地形で平地が少なく、小規模な河川の下流部に狭小な水田が存在するのみで、サトウキビやサツマイモの栽培と牛・豚の飼育を中心とする農業と沿岸漁業が主たる産業である。

加計呂麻島には合計42基の石敢當があるが、面積からすれば約1.8km<sup>2</sup>に一つ、1052世帯であるから約25.0世帯に一つという高密度な分布を示す。しかし、大字ごとに見ると、於斉11、押角9、花富1、薩川2、諸鈍13、須子茂2、渡連1、俵3で、これら8大字には石敢當が設置されているが、他の秋徳、阿多地、生間、伊子茂、勝能、嘉入、木慈、実久、芝、諸数、瀬相、瀬武、武名、西阿室、野見山、三浦の16大字には見られない（大字の記載は50音順）。諸鈍は現在も第1級漁港を擁する島で最も中心的な大字であり、於斉は伊子茂湾の深奥にあって請島・与路島から役場所在地の大字古仁屋に至る中継港、押角は大島海峡に面するという好位置ゆえであろうか、この3大字に合計33もの石敢當が集中している。要するに、24の大字のうちで石敢當の設置されている大字はわずか3分の1でしかないということになる（図5）。

#### (6) 奄美大島の石敢當

奄美大島は、奄美諸島の主島である。面積は約710km<sup>2</sup>で、最高峰の湯湾岳の標高は694m、全体に起伏に富み、北・西・南の海岸線はリアス式海岸で良港が多い。古代において奄美は「海見」や阿麻美とも記されて大和朝廷とのつながりも深かった。他の奄美諸島と同様に、琉球の支配を受けていたが、慶長14年の鹿児島藩の琉球侵攻以降は、鹿児島藩の直轄地となり、特に藩政時代の末期にはサトウキビの強制栽培など過酷な支配を受けた。

近世期は鹿児島藩の郷には属さず、代官の支配下におかれて、名瀬・焼内・西・東・住用・古見・笠利の7間切に区分され、間切の下には13の方があった。『琉球国郷帳』には間切の総石高は1万455石余とされる。大島奉行、のちの大島代官の役所である仮屋の所在地については諸記録によって違いがあるが、笠利方笠利、赤木名金久村と大熊村などを転々として、伊津部村に定着したとされる。

近世における奄美大島では、新田開発に力が注がれて、正徳2年から元文3年の間には494町余の開拓もなされた。また元禄年間には焼内間切横目嘉和知が大島代官の命によって沖縄に渡航し、製糖技術を習得し、奄美大島でも次第にサトウキビ栽培と製糖が拡大していった。これによって鹿児島藩の砂糖買入れが始まり、農民収奪が過酷になっていった。

奄美大島における石敢當は島全体で177基である。面積からすると約4.0km<sup>2</sup>に一つ、165.8世帯に一つということになり、面積はさておき世帯数から見た石敢當の数は決して多くはない。市町村別に見ると以下のようなことになる。

まず笠利町（現奄美市）では、合計15基があるが、宇宿1、笠利3、赤木名（里、外金久、中金久を含む）3、節田3、万屋2、用1、和野2で、川上、喜瀬、佐仁、須野、平、手花部、辺留、屋仁、用安には見られない（大字の記載は50音順、以下同じ）。16大字のうち7大字に設置されていることになる。

龍郷町では合計26基があるが、赤尾木3、幾里4、浦1、大勝2、嘉渡2、龍郷3、戸口4、中勝6、屋入1で、秋名、芦徳、安木屋場、円、久場、瀬留には設置されていない。15大字のうちの9大字に存在することになる。

名瀬市（現奄美市）には合計50基があるが、有屋1、安勝町3、石橋町1、井根町4、入舟町4、春

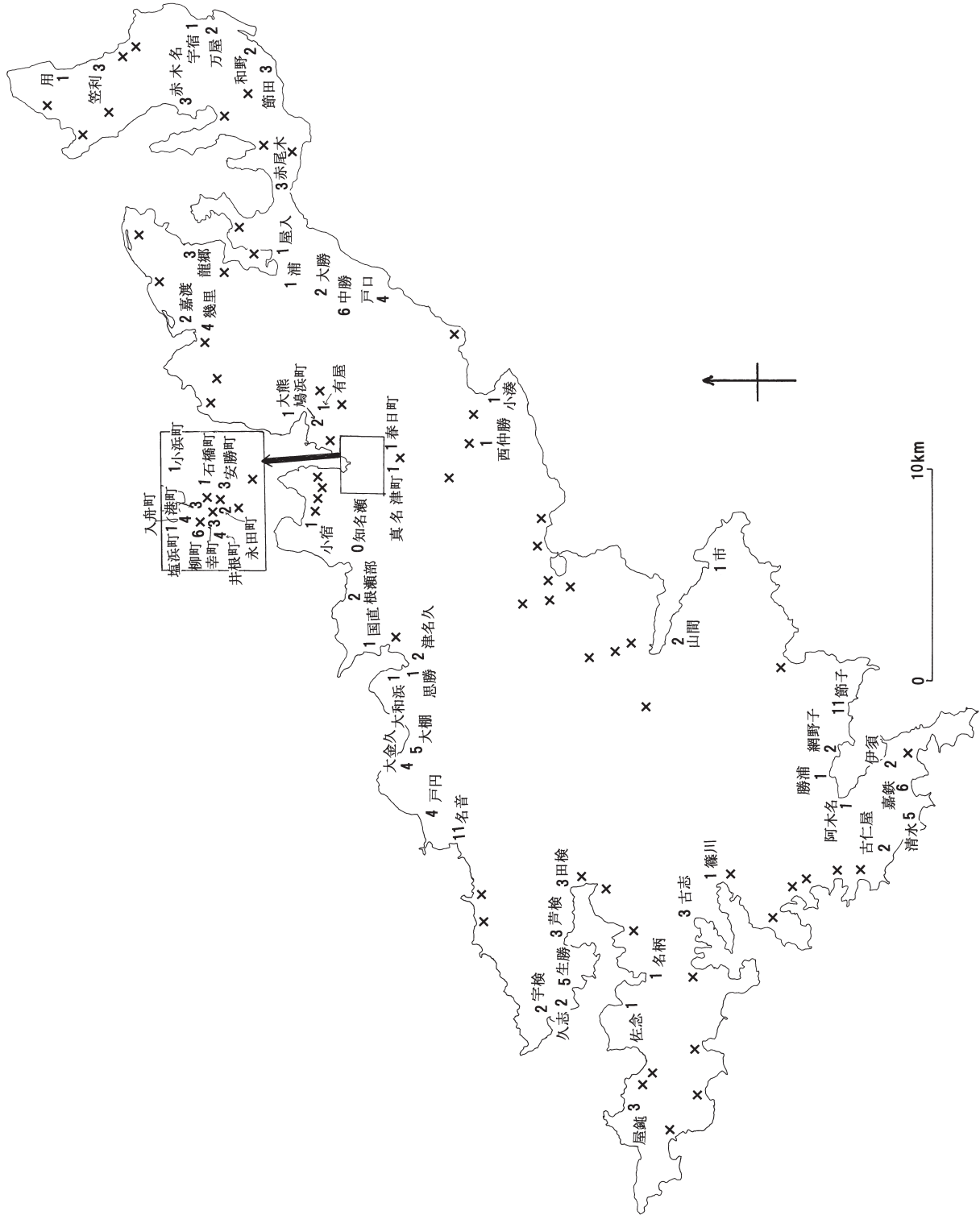


図 6 奄美大島の石敢當

日町1、小宿1、小浜町1、小湊1、幸町3、塩浜町1、大熊1、知名瀬10、永田町2、西仲勝1、根瀬部2、鳩浜町2、真名津町1、港町3、柳町6、矢之脇町1で、朝戸、朝仁、朝仁新町、朝仁町、芦花部、有良、伊津部勝、伊津部町、浦上、金久町、久里町、小俣町、崎原、佐大熊町、末広町、仲勝、長浜町、名瀬勝、平田町、古田町には存在しない。41大字のうちの21大字に石敢當があることになる。

大和村には合計29基があるが、大金久4、大榎5、思勝1、国直1、津名久2、戸円4、名音11、大和浜1で、今里、志戸勘、湯湾釜には存在しない。11大字のうちの8大字に石敢當があることになる。

宇検村には合計20基があるが、芦検3、生勝5、宇検2、久志2、佐念1、田検3、名柄1、屋鈍3で、阿室、須古、部連、平田、湯湾には存在しない。13大字のうちの8大字に石敢當があることになる。

住用村には合計3基があるが、石敢當の設置されている大字は、市1、山間2であって、他の石原、神屋、川内、城、摺勝、西仲間、東仲間、見里、役勝、和瀬には設置されていない。12大字のうちのみ2大字にしか設置されていないということになる。

瀬戸内町には合計96基があるが、このうち奄美大島にある石敢當は34基である。阿木名1、網野子2、伊須2、勝浦1、嘉鉄6、古志3、古仁屋2、篠川1、清水5、節子11で、阿鉄、阿室釜、嘉徳、久慈、管鈍、久根津、花天、小名瀬、蘇刈、手安、西古見、油井には存在しない。22大字のうちの10大字に石敢當があることになる。

奄美大島における石敢當の分布についても、海岸部に立地している集落に多く、内陸部には少ないという傾向がある。また同じ海岸部に立地している集落でも、笠利町の赤木名湾と南西部海岸、龍郷町の龍郷湾に面した龍郷などの集落、名瀬港周辺の中心市街地、大和村の海岸部、宇検町の焼内湾に面した集落、瀬戸内町の伊須湾に位置する節子や皆津崎西部の嘉鉄や清水などの集落のように、港湾機能と後背地に恵まれた各地区における中心地に多数の石敢當が見られると言ってよい（図6）。

## (7) 喜界島の石敢當

喜界島は奄美大島の東約35km、鹿児島本土からは南375kmにある島で、面積は約56km<sup>2</sup>、周囲約48kmの隆起珊瑚礁からなる。最高地点は224m、島の中央部には160mから200mの百之台と呼ばれる台地があるが、総体的には起伏の少ない平坦な島である。開発の歴史は古く、縄文時代の貝塚をはじめとして考古学的遺跡が多い。また最近では大規模な官衙機能も推定される集落遺跡も発掘されている。喜界島も他の奄美諸島と同様に、大和朝廷への朝貢時代、大宰府直轄時代、琉球への朝貢時代、鹿児島藩に合併された時代などに区分されるが、17世紀の鹿児島藩による系図の取り上げなどによって史料はごく少ない。源為朝、僧俊寛、平資盛・有盛・行盛などの来島の伝承が残されているが、いずれも口承の段階をでるものではないとされる。

文永3年（1266）から慶長14年までの340年余は琉球の支配下にあり、荒木・志戸桶・西目・東・湾の5間切に区分され、それぞれの間切には大親・与人・目指・筆子・掟等の役人が任命されていた。各間切の長である大親は琉球王朝から直接任命される例もあったが、島内の豪族のなかから任命されるものもあった。この間、尚徳6年（文正元年、1466）には、琉球への朝貢が途絶えたとして、尚徳王自身が兵を率いて来襲、湾の御殿浜に本陣を置いて激戦、喜界島が降服するという事件も経験した。しかし慶長期には他の奄美諸島と同様に鹿児島藩の直轄地となり、喜界島にも製糖技術が伝わることによって



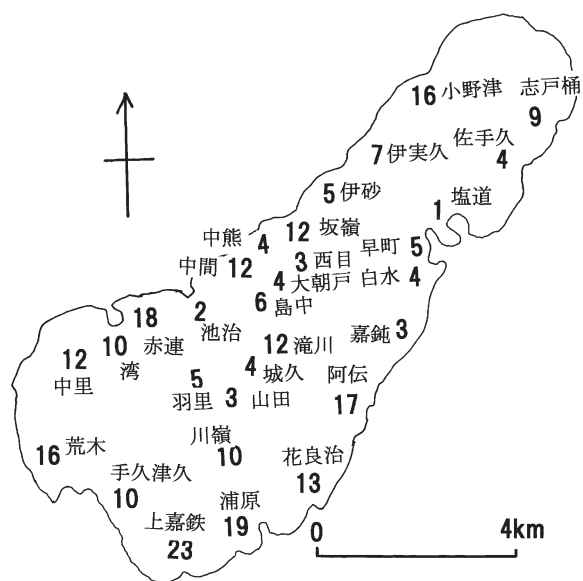


図7 喜界島の石敢當

以後は、鹿児島藩の圧政にあえぐこととなった。

慶長18年には奄美大島に代官所が置かれて、喜界島も大島代官所の支配下にあったが、元禄6年(1693)に喜界島の湾に代官所が置かれることになり、琉球時代の5間切が改められて6間切に分けられた。湾間切(湾・赤連・中里・川嶺・羽里・山田・城久)、西目間切(西目・大朝戸・島中・坂嶺・中熊)、伊砂間切(伊砂・伊実久・中間・滝川)、東間切(早町・塩道・長嶺・白水・嘉鈍・阿伝)、荒木間切(荒木・手久津久・上嘉鉄・浦原・花良治)、志戸桶間切(志戸桶・佐手久・小野津)が構成されたが、これらの集落単位は現在でもほとんど変わっていない。享保11年(1726)の検地では、水陸田畝・宅地総計1670町2反、荒地29町

3反余であった。間切ごとの石高は湾間切2057石余、荒木間切1893石余、東間切1776石余、志戸桶間切1690石余、伊砂間切1550石余、西間切1869石余、合計1万836石余、人口は8828人であったとされる。しかしこれ以降、藩の指令によって砂糖の生産と密売が禁止され、延享元年(1744)には租税は米穀からすべて砂糖に代えられ、文政年間には砂糖総買上げ令・貨幣通用禁止など、島民は地味のよい地にはサトウキビ栽培を強制されることになった。このような圧政は明治中期にまで続くこととなった。

この喜界島における石敢當については、これまで述べてきた奄美の島々とは根本的に異なる特色が見られる。それは奄美諸島の中では群を抜いて稠密に分布しているということである。大字別(行政区別)にその数を記したのが表1である(これまで述べてきた市町村の大字は50音順に記載してきたが、喜界町については喜界町役場の記載順にしたがっている)。なんと喜界島全体で、269基もの石敢當が設置されているのである。喜界島の面積は約56km<sup>2</sup>であるから、約0.2km<sup>2</sup>に一つの石敢當が分布していることになる。また島の世帯数は1980年ごろには3781世帯であったから14.1世帯に一つの石敢當が存在していたということになる。2006年2月1日現在の役場統計では世帯数は4046世帯に増加しているが、この数値からしても15.0世帯に一つの石敢當があることになる。また喜界町には30の行政区(大字・集落では32)があるが、そのすべてに石敢當が設置されており、この島がきわめて特異な存在であることがわかる(図7)。

先にもあげているが、いま一度、奄美諸島における石敢當の分布について見たい。南から順に記すと、与論島では約2.3km<sup>2</sup>、215世帯に一つの石敢當があり、6大字のうちの2大字に設置されている。沖永良部島では、3.4km<sup>2</sup>、187.6世帯に一つ、38大字のうち10大字にある。徳之島は、2.5km<sup>2</sup>、108.1世帯に一つ、41大字のうち17大字にある。請島では2.3km<sup>2</sup>、25.3世帯に一つ、2大字の双方にあり、与路島では0.7km<sup>2</sup>、8.9世帯に一つ、1大字しかないから、この島の場合も全ての集落に石敢當が設置されている。加計呂麻島では、1.8km<sup>2</sup>、25.0世帯に一つという一見すれば高密度ではあるが、24大字のうち8大字にしか設置されていない。奄美大島の場合は、4.0km<sup>2</sup>、165.8世帯に一つ、130大字のうち半分の65大字

に設置されている。もちろんここで掲げた数値は、面積といい、世帯数といい、石敢當は全て集落部分に設置されているものであるから、島全体の面積や世帯数からその密度を考えることは、論理的には不適當である。しかし、いわば表面的なこのような数値からしても、喜界島の0.2km<sup>2</sup>、14.1世帯に一つ、30 (32)の行政区すべてに設置されているという事実の語る意味は大きいと言わざるを得ないのである。

### 三 石敢當の伝播・拡散と文化交渉

#### (1) 鹿児島経由としての喜界島の石敢當

それでは喜界島における石敢當の極端な多さはどのように理解すればいいのであろうか。結論から言えば、喜界島の石敢當は鹿児島から伝播してきたものが大部分を占めると考えたい。要するに、奄美諸島はかつて琉球の支配下に置かれていた。したがって琉球すなわち現在の沖縄島から伝播してきた石敢當もあると思われる。しかし、与論島や沖永良部島に比較すると、以北の島々にはより数多くの石敢當が分布しており、その発信基地として鹿児島藩の中心であった鹿児島を想定することが可能で、そのう

ち喜界島には格段に強い影響があったと考えるわけである。以下、その理由を述べたい。

喜界島における石敢當の設置場所は、基本的には沖縄県内や喜界島を除く奄美諸島と変わらない。一例として図8に阿伝集落の事例をあげておくと、17基のうちの9基が石敢當設置場所として最も適切なT字路の突当りや四差路の突当りに設置されている。またこれらとほぼ同様のL字路の突当りや曲線路にあるものが6基である。突当りという意識が敷衍的に変化している食違いのない交差点の手前にあるものは1基であり、これを補強的な石敢當と考えれば、それほど誤ったものではない。したがっ

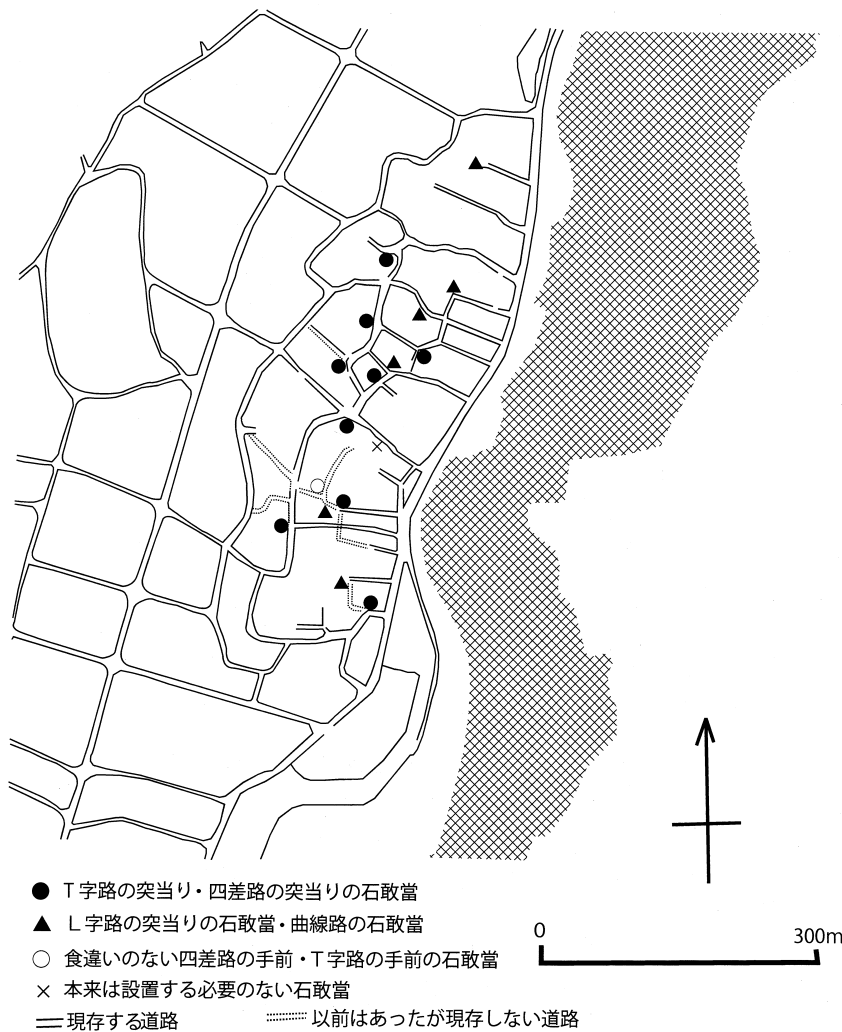


図8 鹿児島県大島郡喜界町阿伝の石敢當 (ハッチ部分は礁原)

て本来は設置する必要のない場所にあるものはわずか1基しかないことになる。

これを喜界島全域において見ると、表1に示したように、269基のうちの181基が石敢當設置場所としては適切なT字路の突当りや四差路の突当りに設置されている。またこれらとほぼ同様のL字路の突当りや曲線路にあるものが54基である。さらに例えば沖縄県那覇市首里地区における調査によって判明したように、行止まりの屋敷はあくまでも例外的なものであると思われるが、行止まりの家の前に設置されているものが3基見られる。突当りという意識が敷衍的に変化している食違いのない四差路の手前やT字路の手前にあるものは27基であり、これは補強的な石敢當と考えられる。したがって設置する必要のない場所にあるものは島全域でわずか4基しか存在しないことになる。これらの点から見れば、喜界島の石敢當の設置場所は、おおむね沖縄県内や他の奄美諸島と同様に、総体的にはその原則を大きく逸脱していないと言ってよい<sup>10)</sup>。

ところが表1に示した設置場所は、あくまでも平面的な場所であって、詳細に見れば、やや石敢當設置の原則からはずれるものも存在する。また石敢當の形状についても、沖縄県内のものとはかなり異なる例も認められるのである。

というのは本来の石敢當は、地を這うように進入してくる悪気に対するものとして認識されていた。したがって沖縄県内などの石敢當は、地表から数十センチ程度の低い位置に設置されているのが通例である。もっとも沖縄県内でも最近になってから設置されたものの中には塀の中程や上部に埋め込まれているものも見受けられる。しかし比較的古いものについてはほとんどが地表にほぼ接した位置に設けられている。ところが喜界島の石敢當の中には、地表近くに設置されているものもあるが、屋敷を囲んでいる塀の上に据えられているものや、地表から1m以上も高い塀の中に埋め込まれているものも相当数認められるのである。またその形状についても将棋の駒のように先端部が三角形になっているものが見受けられる。これらは鹿児島においても見られる特色であって、沖縄県内のものとは大きく異なる点である。なおこのことは喜界島のみならず奄美諸島北部の島においても認められる。さらに梵字や卍などの仏教系の影響、修験道系の縦横に直交した線刻のいわゆる九字紋を刻んだ石敢當も多い。また「石敢當」の字が「石散当」のように誤って刻印されているものも沖縄県内と比べると格段に多いこともあげられる。

日本に石敢當が伝来した時期については判明していないが、小玉氏によれば造立年銘が刻されているもので最古のものは、宮崎県えびの市のもので元禄2年（1689）であるとされる。もっとも年銘の刻されていないものの中でより古いものも想定されるから、これをもって伝来の時期を決定できないことは言うまでもないが、おそらくは中世末期または近世初頭であったと推定しても大過はないであろう。

ところが喜界島における石敢當の設置は、かなり新しいと考えられるのである。久永氏の喜界島報告書によれば、年銘のある事例で最も古いものは、上嘉鉄にある昭和28年（1953）であるという。薩摩・大隈地方で古い石敢當があるのは、麓と呼ばれる地区で、識字階層の武家社会を中心として分布しているともされる。したがって久永氏は士族集团的な地区が存在しなかった喜界島においては、江戸時代に

10) 表1の作製にあたっては、前掲注3)の久永氏の喜界島報告書に記載されている石敢當の分布を、あらためて現行の喜界町発行1:2500地図の上で確認したうえで、その位置を分類した。

表1 喜界島の行政区（大字）別の世帯・人口と石敢當

行政区名	大字・集落	世帯 (1980年頃)	世帯 (2006年)	人口 (1980年頃)	人口 (2006年)	石敢當	T字路 四差路 突当り	屈曲点	行止まり の家の前	交差点 手前	根拠の ないもの
湾	湾	452	645	1488	1549	10	10	0	0	0	0
赤連	赤連	565	615	1775	1287	18	17	0	0	1	0
中里	中里	188	319	562	765	12	11	1	0	0	0
荒木	荒木	253	279	846	637	16	13	3	0	0	0
手久津久	手久津久	99	90	265	182	10	9	1	0	0	0
上嘉鉄	上嘉鉄	238	245	781	563	23	8	11	2	2	0
浦原(含む先山)	浦原(含む先山)	149	128	453	255	19	13	5	0	1	0
	(先山)		61		132		5	3	0	0	0
	(浦原)		67		123		8	2	0	1	0
川嶺	川嶺	100	81	226	147	10	7	2	0	0	1
羽里	羽里	70	68	193	125	5	4	1	0	0	0
山田	山田	14	14	30	22	3	2	0	0	1	0
城久	城久	47	47	132	101	4	4	0	0	0	0
滝川	滝川	30	29	87	48	12	8	1	0	3	0
島中	島中	46	47	127	83	6	5	1	0	0	0
池治	池治	46	57	112	115	2	2	0	0	0	0
中間(含む先内)	中間(含む先内)	53	49	116	90	12	8	2	1	1	0
	(中間)		33		59		5	2	1	1	0
	(先内)		16		31		3	0	0	0	0
中熊	中熊	42	34	112	78	4	2	1	0	1	0
大朝戸	大朝戸	51	52	115	90	4	1	1	0	2	0
西目	西目	17	11	41	22	3	1	2	0	0	0
坂嶺	坂嶺	95	81	260	159	12	7	3	0	2	0
伊砂	伊砂	35	26	109	54	5	1	3	0	1	0
伊実久	伊実久	77	66	201	119	7	6	0	0	0	1
小野津	小野津	247	236	653	441	16	12	4	0	0	0
志戸桶	志戸桶	245	263	749	594	9	5	2	0	2	0
佐手久	佐手久	106	115	362	263	4	1	0	0	3	0
塩道	塩道	98	99	281	218	1	1	0	0	0	0
早町	早町	75	71	222	156	5	3	2	0	0	0
白水	白水	70	58	177	120	4	2	0	0	2	0
嘉鈍	嘉鈍	73	63	205	134	3	1	1	0	1	0
阿伝	阿伝	64	49	153	100	17	9	6	0	1	1
花良治(含む蒲生)	花良治(含む蒲生)	136	109	331	179	13	8	1	0	3	1
	(蒲生)		23		39		6	1	0	0	0
	(花良治)		86		140		2	0	0	3	1
						269	181	54	3	27	4

多くの石敢當が設置された可能性は低く、いろいろの規制が解かれて農家の経済的余裕がでてきた明治期後半から、設置されていったのではないかと推定される。ちょうどそのころに喜界島でも茅葺の学校を瓦葺にするなどの改築工事や神社仏閣の造営がはじまり、鹿児島から政五郎ドンという棟梁や大勢の大工・石工が招かれて渡島、彼らから石敢當が伝えられて造立されたのではないかとみられる。そのころの浦原石と呼ばれる石灰岩の墓石や手水鉢、石燈籠なども多く残っている。したがって久永氏の推定は的を射ているものと考えてよいであろう。



いずれにしても、奄美諸島における喜界島の石敢當の分布状況などからすると、かつての琉球からではなく、むしろ鹿児島に広がって以降に、元来の伝播方向からすれば逆の方向で、鹿児島（薩摩・大隈地方）から南下して伝わってきたとするのが妥当であろう。

## (2) 石敢當の伝播・拡散とその変容

先にも小玉氏の著作によって、日本における石敢當の分布は、沖縄・南九州に濃密に存在すること、北は北海道の函館まで散在しており山形・秋田・青森に古い石敢當が存在し、とくに秋田にはきわめて多くの石敢當が確認されることを述べた。また山陰・北陸・越後の日本海側には見られないこと、四国の徳島の13基はかつて27基を数え、古いものもいくつか残っていること、中国との交流拠点である福岡・長崎に石敢當の影が薄いことなども述べた。このような分布状況から、石敢當の伝播や拡散について、どのように考えればよいのであろうか。

まず最も重要な流れとして中国ことに福建などから琉球へのルートを考えるべきであろう。この場合、中国南部から八重山・宮古を経て沖縄島に伝わったとするよりも、当時としては最新の地理観である風水思想の一環として、中国からまずは琉球国の中心である沖縄島、それも唐栄久米村を発信基地として首里や那覇に伝わり、しかるのちに琉球国内へと拡散していったと考えるのが自然である。宮古・八重山へは、方向としては逆の流れを想定できる。さらに次第に琉球国の支配下にあった奄美諸島へも広がっていった。沖縄島に近い与論島や沖永良部島を経由して、徳之島や奄美大島へ伝わり、さらに近隣の喜界島や加計呂麻島へも、部分的には伝播したことも想定できる。しかし鹿児島への伝播としては、沖縄島から奄美諸島を順次北上して、鹿児島へ伝わったということは考えがたい。

むしろ鹿児島（薩摩・大隈地方）へは、鹿児島藩の琉球支配の結果として、首里・那覇から直接的に伝わったと考えられる。さらに江戸へも鹿児島藩から伝えられ、さらに江戸を発信基地として、全国なかでも東日本や北日本に拡散していったことも推定できる。ただし西日本に関しては、鹿児島から宮崎などの九州地方への拡散は確実であろうが、近畿地方における広がりについては慎重に考える必要がある。すなわち鹿児島から江戸への伝播過程でたとえば琉球使節の江戸上りの途次に広がっていった可能性もあろうし、四国ことに徳島などから大坂へ伝わり、大坂から近隣の地域に拡散していったということも想定できる。これらの点については、なお詳細な検討が必要であろうが、本稿で強調しておきたいのは、琉球から鹿児島へ伝わり、逆方向に奄美諸島に広がっていったという事実である。

要するに、文化交流や文化交渉について議論する場合、往々にして、一方向的な伝播過程とルートのみが強調される。しかしこれらの流れに関しては、一方向的な流れのみで解釈できることは、むしろ稀であろうと思われる。本稿で取り上げた石敢當の伝播・拡散過程からもわかるように、双方向的というよりも多方向的かつ交錯的なものとして理解すべきであろう。

さらに言えば、石敢當のように少なくとも中国においては唐時代にまで遡りうるようなものについても、現代に至るまでの、時間枠を長く設定したうえでの検討が必要である。古い伝統に端を発する石敢當であるとは言っても、現在もなお生き続けているのであって、なお日常的に変容を遂げつつあることを強調しておきたい。

たとえば、石敢當は現在もなお製造され続けているのである。その実態を沖縄県石材事業共同組合で

聞き取り調査した<sup>11)</sup>。沖縄県における石材加工事業のうち石敢當製造の占める割合は、ごく少ない。沖縄県内の各種土木工事における石材加工はきわめて多岐にわたるが、そのうち首里城をはじめとする史跡・文化財の修復や、家屋の石垣工事さらに墓の建設などの比重が高いことは、日本の他地域とは異なる特色を示している。石敢當製造は、これらの伝統に根ざした沖縄石材加工業のごく一部を占めているに過ぎないが、それでも石敢當製造を主力製品製造の傍らで行っている業者は県内に5ないし6業者存在するという。県内で得られる砂岩（ニービ）を原材にした石敢當は、高さ50cm程度のもので3万円から5万円程度で得られる（この場合は一文字あたり2000円の彫り料を含む）という。もちろん大きな石敢當になれば、30万円から40万円程度のものもあり、石材によっても大きな差がある。

ただし石敢當に関していえば、最も需要の多いものは表札型の石敢當で、県内にある5ないし6業者によって90%以上が製造されている。逆に言えば、表札型の石敢當のほとんどは沖縄県内で製作されているのであり、奄美諸島や他の日本あるいは外国産のものはほとんど存在しない。価格は1万円（石材込み）が平均的であるという。これらの製作はほとんど機械によって字が彫られるが、具体的な作業はゴーグル、マスク姿で、「箱」の中にゴム手袋をした手を入れてガラス越しに文字を彫っていく。石の表面にはゴムを張り、そこに文字を書いて文字の部分を取り取り、その部分にコンプレッサーから送り込む強烈な空気で鉄砂と呼ぶ細かい鉄をノズルを使って吹き付ける。弾力のあるゴムは鉄砂をはじくが文字の部分としてゴムが切り取られたところの石だけが削られていくという方法である。このような方法で作られた石敢當が沖縄県内をはじめとする日本国内で最も多く見られるわけである。

ところが沖縄県内の観光土産店では、これら以外の石敢當も多く見受けられるようになってきた。その多くは陶器やガラス製の石敢當であって、大きさも各家庭の机の上や玄関の飾り台などに置かれる10cm内外のもので、価格も数百円である。これらのほとんどは具体的な統計資料があるわけではないが、中国産・台湾産また最近ではベトナム産のものも多いらしい。もっともなかには、小さくても数千円の漆喰製の石敢當も見られるが、このようなものは沖縄県内の高技術を持った漆喰職人によるいわゆる作家物である。

さらに最近では、ステッカーに石敢當の文字を印刷したものや、携帯電話のストラップとして石敢當をデザインした土産品なども登場するようになってきた。かつては自然石に職人が文字を彫りこみ、かつT字路の突き当たりに設置されていた石敢當が、材料や製作技法さらにその用途にいたるまできわめて多様な変貌を遂げつつある。

本稿では中国から琉球に伝来した石敢當をとりあげて、その伝播・拡散を考察したが、その結果として「文化交渉」なるものを考える上での要諦を想定しうるように思われる。すなわち一口に歴史的伝統に根ざした事象であるとはいっても、文化というものは常に変容・変質を遂げつつあり、その各段階で多様な広がり方をする、伝播・拡散ルートはきわめて多方向的に検討する必要のあること、異なる

---

11) 沖縄県石材事業共同組合（沖縄県浦添市牧港）営業部長の大嶺司氏による教示を受けた。なお氏からは数々の教示とともに、『沖縄県石材事業共同組合 組合概要』（刊行年不記載、1-8頁）、『石材の安定提供と事業の省力化について 平成7年度活路開拓ビジョン調査事業報告書』（沖縄県石材事業郷土組合、1996年3月、1-57頁）、『沖縄県石材事業共同組合 1997. 石造カタログ』（1997年3月、1-94頁）などの資料提供を受けた。

文化の接触地帯においては従来のものとは異なるものが誕生することなどである。さらに石敢當に限らず、ある種の文化的なものが伝わるには、ある特定の個人や集団がその契機となる場合が、きわめて多いことをも認識すべきであろう。

[付記]

本稿は久永元利氏の熱意あふれる詳細な調査に多くを負っている。久永氏には直接面談して、多大なる教示を賜った。ここに記して心からの敬意と感謝を申し上げたい。また内容の一部は、関西大学文化交渉学教育研究拠点の第5回文化交渉学創生部会において報告した（2007年12月14日）が、メンバー諸氏から示唆に富む意見をいただいた。